

蒸発

西尾佳織

登場人物

モリチャン：引きこもっている女。隣家の男を双眼鏡でのぞき見ている。

ノツチャン：モリチャンとルームシェアしている女。

時 現代。

場

家のリビングルーム。という設定だが、生活の営まれている有機的・日常的な空気はない。あくまで一時的な仮住まいのちぐはぐさ。裕福で窮屈なジャパニーズガールたちの収容所。

空間内には、以下に記される物しかない。まず舞台下手奥に、テーブルや箱状のもの、椅子などあり合わせのものが適当にバリケード状に積み重ねられ、二メートルほどの高さになっている。モリチャンがその高台に登って隣家をのぞく。上手手前に、若い女二人のルームシェアには不釣り合いに立派な革張りのソファと、ローテーブルがある。上手奥には、地下に通じる穴があり、どうやらそこに台所や寝室などがある様子。

0 (開演前)

大きな音量で音楽がかかっている。
長らく着替えていなさそうな部屋着姿のモリチャン、入ってきて高台に登り、観客のいる方向にまっすぐ双眼鏡を向け、のぞき出す。目標物を確認すると、だらしなく弛緩した表情で、にやにやしながら、モジモジしながら見る。「んふ」というような笑いが時々入る。何かつぶやいているようだが、音楽が大きくて、その内容は聞き取れない。

1 (開演)

モリチャンのその奇妙な姿が十分に焼き付けられてから音楽は消え、モリチャンの声が聞こえ始める。それで彼女が、隣家の男のオナニーする様子をのぞきながら実況中継していたことが分かる。

モリチャン

おおーやってるやってる。おはようございまーす、ひろきさん。今日は……(男の室内のテレビに目を向ける)お！『オナニー見てもらえませんか』シリーズ！好きですねえ、ひろきさん。これは朝から気合を感じます。今日は期待できそうですネ！ いやしかし、今時 DVD という辺り、ひろきさんのコダワリが感じられます。………集中、しています。ひろき選手、集中している。淡々と、肅々と、自身を高めていきます。……(モリチャンも集中。と、男の部屋の鶏が視界に

入ってきて邪魔だ。手でどけようとする(仕草)あ！こっちは今いいんだよ！ あーん、見えない！ 今ひろきがいいとこなんだよ！……(仕方なく再びテレビに目を移し、そちらで高める。AVのあえぎ声のアテレコ) ああ！ あ！ あん！ あ！ あ！……ああ！(男、どうやら射精に至った様子。それにシンクロするように、モリチャンも脱力してゆるんでいる)……ん？ こっちゃんも、興奮しちゃったかな？ あ、あれ？ ひろき、立ち上がった、どうした？ ……あー。はい、ティッシュでした。ひろき選手、ティッシュの用意を忘れたようです。ええ。これは、あるあるネタですね。ハイ、鉄板です。非常にこれは、多くの方の共感を得られるところなんではないでしょうか。(しばし、無言で見る時間) ……お。ん？ なんと、若干のインターバルを挟んでの第二回戦、いっちゃいます？ イっちゃいますか！ さアすがひろき選手！ こちらの期待を軽々と超えるハイパフォーマンス。よ！ ヒロking-

モリチャンの台詞中、適当なところで、地下に続く穴からペットボトル(ニリットル入のアクエリアスなど)を持った女の手がぬつと現れる。ペットボトルを穴の淵に置くと手は引っ込み、次いで穴からスウェット姿のノツチャンがぬるりと出る。ノツチャン、

ペットボトルを持ってソファへ。

ノツチャン (モリチャンのつぶやきを無視して) おはよう

モリチャン あ、おはよう。

ノツチャン また見てんの？

モリチャン うん。

ノツチャン ひろき、朝からかよ。

モリチャン、実況の続きに戻る。ノツチャン、ペットボトルを置いて、また地下へ。ビニール袋に入ったままのロールパンとラッブのかかった皿(いつかの残り。骨付きの鶏料理)を持って戻ってくる。朝食を取り始める。ペットボトルは直飲み。

モリチャン あ、ねえ鶏、卵産んだよ。

ノツチャン え？

モリチャン こないだからいるやつ、今日卵産んだ。やっぱメス

だったんだね。

ノツチャン へへすごいね。

モリチャン ね。ひろきん家に慣れたのかなあ。

ノツチャン モリちゃん、また寝てないの？

モリチャン んー？

ノツチャン 夜はちゃんと寝た方がいいよ。

モリチャン ……なんか、寝れないんだよね。

ノツチャン ふーん

モリチャン でも昼に寝るから、大丈夫。

ノツチャン だから寝れないんだよ。

モリチャン そーねー

モリチャン、会話が途切れるとすぐ双眼鏡に戻ってしまう。ノツチャンは食べている。

間

ノツチャン 食べない？

モリチャン (答えず) ……あ！(何かを発見した様子)

ノツチャン たまには買い物行くとかさー

モリチャン あ！ ねえ！ ねえノツちゃん！ ひろき、鶏とやっ

てる！

ノツチャン え……

モリチャン たぶん、うん、やってる！

ノツチャン え、うそでしょ？

モリチャン や、ほんと！ 鶏、テーブルに置いて、上から押さえ

て、後ろから、してる！

ノツチャン ……最悪だ……。

ノツチャン、食べるのをやめる。

モリチャンはまた双眼鏡に戻り、興奮した様子でしばらく見ている。双眼鏡の先の男のピストン運動のリズムが、うつすらと伝染している。

2

モリチャン ……なんか…意外と単調だな…。

ノツチャン ねえモリちゃんてさ、バイトとかしたことあんの？

モリチャン (ノツチャンの質問に答えているのかどうか定かでない) ……この単調さは何かに似てるなーと思ってて、

ノツチャン え？

モリチャン それで、そうだ、昔、日雇いで行かされた工場だ！ っ
て思ったのね。

ノツチャン あ、うん。

モリチャン 所定の位置に、物を置く。入れる、抜く。置く、入れる、抜く。って、コンビニの自社工場で働いててさ。

ノツチャン へー

モリチャン でもキツイ割に身入りが少なかったから、三日でばっ
くれたんだけど、ひろき。

ノツチャン え、ひろき？

気付けばモリチャンは、また双眼鏡をのぞいている。双眼鏡の先に、かつて働いた工場を見ているかのよう。

モリチャン そうそう。夏で、冷やし中華を作るラインの担当で。

なんか、置く。熱で、ビユるっ。置く。熱で、ビユるっ (と言いなながら、双眼鏡から目を離し、リズムカルに、物をラインに乗せては隣に流すような手の動きをし始める。合わせて足で、リズムを刻む)。て。ビニールを容器に載せると、機械が熱でビユるっと切つてくれるんだけど。

ノツチャン あーそれ知ってる。私も前にお弁当つくる工場で働いたことあるんだけど、あれって超キツイよね。

モリチャン うん、日本人少しかいなくて、ラインの最初の方の楽な仕事に集まっててさ、でも、その輪に入れなかった。

ノツチャン あ、そうだよー。周り、アジア人ばっかで、上司も

アジア人だから何言つてつか分かんないだよー。で、あいつら、仕事中でもお構いなしに、ひっきりなしにペチャクチャペチャクチャ喋るじゃん、自分の言葉で。ここは日本なんだから、日本語話せよって。

モリチャン うん。だから、そう英語で言つてやりたかったんだけど、なんて言えばいいのか分からなくて。あいつら。だからずっと黙ってた。

ノツチャン (輪に入れずに、黙々と作業をするモリチャンを茶化して真似をする)「置く。熱で、ビユるっ。置く。熱で、ビユるっ」？

二人 (言葉と手の動きに、モリチャンも加わって) 置く。熱で、

ビュるっ。置く。熱で、ビュるっ。

工場のイメージが最高潮に共有される。モリチャン、手の動きと足のリズムは続けながら、語り始める。ノツチャンはそのまま「置く。熱で、ビュるっ」を続ける。

モリチャン 「暑くてうるさくて単調で、意識を失いそうになりながら、気付けば俺は、半勃ちになっていた」

ノツチャン (手を止めて) え、半勃ち？

モリチャン うん(笑) (作業の続行を促すように) 置く。熱で、ビュるっ。置く。熱で、ビュるっ。(戻って続ける)

ノツチャン ……置く。熱で、ビュるっ。(戻って続ける)

モリチャン 「麺のグニユグニユが女のあるその中に似てるんだ、って中学のとき、杉山が言っていた」

ノツチャン (手を止めて) え、え、杉山？

モリチャン 「そう、杉山はオナホ作りの名人で、その杉山の最高傑作がカップヌードルホールだった。カップヌードルを固めて作って、お湯を捨てて、底に穴を空けて、やる(穴に指を突っ込むような仕草。それを見逃さず、ノツチャンは、嫌悪感)『感触と温度が一番リアルだ、中でも日清が最高だ!』とか言ってたさ(笑)」

この頃には、「置く。熱で、ビュるっ」のリズムは完全に消え、現れかけた工場の情景も消え去っている。

ノツチャン ……ええ？

モリチャン 「でも俺は、食べ物を粗末にするのに抵抗があって、一度も試さなかった。だから俺は未だに、リアルを知らない」

3

ノツチャン ……。

「だから」って、なんだよ! ていうか「リアル」って、もうその単語の選び方の中二感がヤバイんだよってことにはほんと、ひろきは気付いた方がいい!

モリチャン うん。「あのとき男子校へなんか行かなかったら、俺の人生ももう少し違うものになってたろうか…。」とか、思ってたそうだよね。

ノツチャン あー絶対思ってる。でもそんなことないから! どこまで行っちゃって戻ったってお前はお前だから! ひろ

きいいいい!

モリチャン 「ハイ! すみません! 実は工場バイトで一度だけ、あまりに単調な仕事に自分を消費されてる感に耐えられなくなった腹いせに一度だけ、冷やし中華とセツクスしました!」

間

ノツチャン ……モリちゃん、なんか今日はシモで攻めるね？

モリちゃん え？ あれ、そうかな（照）

ノツチャン ……うんでも、わかるよー。あのラインの作業って、後

ろの方がけっこう大変なんだよね。

モリちゃん あ、そうそう。

ノツチャン それ分かってるから、慣れてる人が楽なところばっか先

に取っちゃってさ、そいでこっちがミスったら超怒鳴

ってくるし、しかもアジア人の上司、基本的に何言っ

てるか分かんないし、だからもうほんとふざけんなっ

て思ってる。

モリちゃん うん。

ノツチャン で、私、ラインの最後の、麵の容器になんかビニール

を巻く係で。なんか、置く。熱で、ビユるっ。置く。

熱で、ビユるっ。て。

モリちゃん うんうん。

ノツチャン でも研修もロクに受けてないから、つーかなかったか

ら、研修、だからその「載せ」が全然間に合わなくて。

だってなんかその「ビユるっ！」てやつで事故とか起

こつても全然補償してくれないと思うのね、たぶん。

モリちゃん あー！（同調）

ノツチャン

だから坦々麵がどんどん流れて来るんだけど、すごい
たまっちゃって、詰まっちゃって、たぐさんの坦々麵
がケースごとビ！ ビ！ てめちゃくちゃに切られち
やって。…あれはもう、大惨事だったあ（笑）

モリちゃん

あー。うんうん。あ、ごめんでもあの、冷やし中華な
んだ。坦々麵じゃなくて。

ノツチャン

ん？ あ、そうなんだ。でも私が作ってたのは坦々麵
なんだけど。

モリちゃん

あ、うんでも私が、ていうかひろきが、セックスした
のは冷やし中華で。

ノツチャン

あ、へー……
うん。坦々麵だとさ、たぶん辛いじゃん、たれが、ス
ープが（？）。だから痛いつていうか、しみると思っ

モリちゃん

だよ。先っぽとか。

ノツチャン

先っぽ……？
まあ、私にはよく分かんないんだけど。

モリちゃん

ん？ あ、うん（？）
いやだから、ひろきが、ひろきは冷やし中華のライン

ノツチャン

にいたわけ（観客に話しかけ出す）なんですけど、で、
（ノツチャンを指し示し、観客にさらすようにしながら

ら）同じように（？）、やっぱ全然ラインの速度に間に
合わなくて、（話しかける相手をノツチャンに戻す）も

う全然間に合わないの、「載せ」が。だからやっぱ（「あ

なたと」の意でノヅチャンを指して) 同じように冷やし中華、すごい容器ごと切られちゃって、で、これはもう出荷できないな、完全廃棄だなんて思って、逆にすごい千載一遇のチャンスだなど、思った。

ノヅチャン

あ、うん。

モリチャン

で、やってみた。(モリチャン、腰を前後に振り始める。以下、ずっと腰を振り続ける)

ノヅチャン

え

モリチャン

あ、もちろん周りの人(観客)にはバレないようにだよ!

ノヅチャン

いや、バレるでしょ。

モリチャン

うんまあ正直バレたんだけど、その展開がやってくるのはまだこの後で、だから今は、まだバレてなくて、ひろきはラインの一番最後で「載せ」をやるフリをしながら、フリっていうかまあ実際やりながら、下の方で、冷やし中華と、セックスしてる(双眼鏡でまた男を見始める)。

ノヅチャン

ん? 今、鶏は?

モリチャン

(一瞬、双眼鏡から目を外し、ノヅチャンに話す) っていうのが、二〇〇四年の工場派遣バイトのときのこととで、そのときのことを思い出しながら、今、鶏と、セックスしてる(双眼鏡に戻る)。

ノヅチャン

ああ…

双眼鏡をのぞきながらカクカクと腰を振り続けるルームメイトを、遠くからぼんやり見上げるノヅチャン。

4

ノヅチャン

鶏、どうしてる?

モリチャン

じっとしてる。

ノヅチャン

私が鶏だったら、死にたい気分だな。

モリチャン

そう?

ノヅチャン

だって嫌でしょーあんな奴にあんなことされて。まあでも、鶏の頭じゃわかんないのか。…でもやだ。あんなだったたら何も分かんない方がマシだし、死んでる方がいいな、私は。

双眼鏡をのぞきながらカクカクと腰を振り続けるモリチャン。

ノヅチャン、ずっと収まっていたソファから立ち上がり、プロセニアムの画面から抜け出すようになめらかに進み出て、難なく観客に話しかけてくる。

ノヅチャン

私が鶏だったら、受け入れるのにつて、(モリチャンを指し) たぶん、考えてるんだと思う。

ノヅチャンが観客と一緒にあってモリチャンを観察する、間。

モリチャン

鶏は、じっとしている。突っ込まれても何も感じないのか。単調な、ピストンを続ける。

「それにしても、俺は、どうしてここまで来てしまったんだろう。どうしてこの年まで、一度も誰かに受け入れられたことがないんだろう。って、二十二歳だった二〇〇四年に、思っていた。優しくする準備は出来ているのに、どうして誰とも優しくし合えないんだろう。って、三十一歳になっっている今この瞬間も、思っている。理由は自分で分かっている。誰だって、俺だって嫌だ。誰からも相手にされなくて冷やし中華とセックスしてる奴なんて。そこから九年経ってまた今度は鶏とセックスしてる奴なんて。※1気持ち悪い。(ノ) ヅチャンが話出したら、一度喋るのを止める。※2からまた続ける) ※2チクショウ、冷やし中華は冷たすぎる。生身の人間の中は、もっとあったかいんだろう。俺は怒(いか) っている。怒りが真っ赤な熱になって先端に集中してくる。本当は俺は、他人への優しさなんて一ミリも持ち合わせていない。自分が恥をかかないこと、自分のことだけでいつも頭がいっぱいだ。だから俺は、怒っているのに、こんなに空しい存在の自分にも、こんな人間を作り出したことまでの流れにも腹が立って仕方がないのに、中華麺がやさしく俺を包

み込んで、それしきで俺は慰められ、カムダウンしてしまふ。冷やし中華の容器は幅が広いから、麺がギョツと集まらなくて全然だめだ。やっぱり杉山の言った通り、カップヌードルがベストなのか？ チクショウ！」

モリチャンの腰を振る動き、止まる。

5

ノツチャンは、モリチャンの言葉を聞きながら、鶏の自分を想像する。モリチャンの語る男の言葉が自分に入ってくるのを受け入れながら、扇情的に身体をくねらせ、(※1あたりから) モリチャンの言葉にかぶせて割って入り、語りかける。

ノツチャン

私だったら受け入れるのにな、たぶんモリちゃんは思っている。「ていうか、私じゃだめかな？ ひろき、

鶏とやるぐらいだったら、私でもいいんじゃないの？ だめなの？」って、モリちゃんは考えている。

モリチャン

考えてないよ。

ノツチャン

うんでも、「ひろきは鶏が好きだったのかな？ それとただ単に寂しかったのかな？ほんとに鶏が好きだったんなら、それは私にはちよつと分かんないです。

私の性的嗜好は、たぶんいたって普通だから。でもも

し誰でもよくて、ただ寂しくて、いや寂しいなんて情緒的なものですらくなくて、鶏でもいいくらい誰でもいい、ほんとに純粋な性欲だったなら。(モリチャンに話しかける) 私じゃ、だめか? 私けっこう、受け止めると思う。※2だって私、ひろきの気持ち、分かる。

私だって寂しいし、私だって受け止めて欲しい。ていうか今日わかった。今まで私、ひろきが自慰行為に励んでるのを観察して、誰にも受け止められないひろきの寂しさが溢れ出してきているのを見て、確認して、それが私をほんのひと時でも安心させてくれるってところが確かに、あったと思う。自分と同じくらい孤独でどうしようもない生を生きてる人がここにもいて、だけどそれをネタにして笑って、友達と共有できる分だけ自分の方がいくらかましですよって、思おうとしていたと思う。最低だ」

モリチャン

そうかな、最低かな?

ノツチャン

うん、最低。「だからひろき、そのファルスをあたいにぶち込めよ!」

モリチャン

……。「さっきから、鶏はずっと無反応で、痛がりもよがりもせず、俺の存在なんかまるで関係ないみたいになじつとしていて、温かい分だけ余計に俺は悲しくなる。生身なんて全然よくない。映像を見て一人でしている方が、よっぽど寂しくなかった」

6

モリチャンは、頑なに双眼鏡の先を見つめ続けている。ノツチャンは、ずっとモリチャンに話しかけていたが、目をそらす。ノツチャンはもうモリチャンを見ない。

ノツチャン

鶏を生産する工場のこと、いつかフェイスブックでシェアされて見ました。そこでは鶏は初めから脳を取られて、生まれたらまっすぐ「食肉」に向かうそうです。生存するための最低限の能力だけ残した植物状態みたいな感じで、パック詰めになって栄養はチューブで受け取って、効率よくお肉を生産してくれているのは、プリマスロック。皆さんのご期待・ご要望にお応えします、プリマスロック。プリマスロック。白色プリマスロック。は、アメリカで作り出された肉専用メス系統種。白色コーニッシュの雄と交配させ、産肉機能が非常に優れたブロイラー用のヒナを生産しています。産肉機能、ガ、非常に優れたブロイラー用の、ヒナ、を、生産している、マス。

モリチャン

「でもサンニクって、『肉を産む』と書いてサンニク。なわけですけども肉、産んでないよね。自分が肉だもんね。なんだよ産肉機能で。生産する側じゃなくて生

産される側。そしてそのままずっと消費されていく側。てこと。あーあ」

ノツチャン

(ジャパネットタカタの人) なーんて否定的になること、ないんです！ いいですか？ ハイ、ドン。これまでの方法だと、殺して食べられる状態になるまでに鶏が感じていた苦痛、そりゃ普通誰だって苦痛ですよ。ネエ、自分が殺されて食べられるなんて。この苦痛を、なんと！ 今回は！ 鶏を植物状態にすることで完全カット！ 鶏の苦痛を減らすことに成功して、倫理面まで全面クリアー！ しちゃったんです！

モリチャン

「って、お前が言うな」ってひろきは言う。「苦しなくて嬉しいなんて、鶏の声勝手に代弁すんな。お前に鶏の気持ちかわかるのか？ 誰にも、誰の気持ちも、わかんないだろう」ってひろきは、言っている。ひろきに「いいね！」

モリチャン

ひろき、「いいね！」**ノツチャン**「いいね！」**モリチャン**「いいね！」**ノツチャン**「いいね！」**モリチャン**「いいね！」**ノツチャン**「いいね！」

モリチャン「いいね！」**ノツチャン**「いいね！」**モリチャン**「いいね！」**ノツチャン**「いいね！」

モリチャン「いいね！」**ノツチャン**「いいね！」

モリチャン

って単に「いいね！」ボタンを押すだけじゃなくて、本当はあたしはもう少し、何かしたい気分になってい

る。自分の意見をすこし前に、自分というものの存在をもうすこしだけ前に、押し出したくなっている。

ノツチャン、モリチャンが話している間に、頭の方からずりりと地下の穴に消える。

モリチャン、ノツチャンが去っていくのを見ていながら、

モリチャン あたしはここにいますよー

モリチャン いるよー

間

モリチャン

ってことでちよつと勇気を出して、ひろきのクールな意見を自分のタイムラインで「シェア」してみる。って言ったってどうせあたしには友達がいらないから、フェイスブックの友達はたった二十二人だから、シェアしたところで高が知れてる。っていうかフェイスブックって「なりすまし申請」とか最近急速に荒れてきているけど、その「なりすまし」の奴らにすらあたしは友達申請されないけど、でも基本は本名で登録が原則だから、ひろきの本名をあたしは知らないから、だからあたしはひろきと繋がれない。ひろきはあたしが勝手

にイメージで付けた仮の名前。こんなに近くにいるのに繋がれない、ひろき（仮）。あなたのことを、私は何も知らない。

モリチャン、のそのそと高台から降りてきて、ソファまでやってくる。ノヅチャンの消えた穴に向かって声を掛ける。

モリチャン いただくよー

モリチャン、鶏を食べ始める。

もそもそと食べていると、穴から、着替えてメイクもしたノヅチャンが出てくる。流行を押さえた、粋からはみ出さないファストファッション。

ノヅチャン、音もなくソファに近付いて、背後からモリチャンの頭に触れる。モリチャン、振り返る。

モリチャン トリ、美味しいね。

ノヅチャン うん、安かったけど意外といけたね。

ノヅチャン、何ということのないちよっかいをかけながら、

ノヅチャン モリチャン、わたし今日遅くなるかも。

モリチャン ん。わかった。

ノヅチャン、行ってしまふ。

モリチャン、振り返り、それを見ている。ノヅチャンが見えなくなるまでずっと見ていてから、またはむはむと鶏を食べる。

余韻なく、暗転。